

リビング・ヘリテージの国際協力を推進するために

モデレーター：稲葉信子（東京文化財研究所）

パネリスト：三宅理一（慶應義塾大学大学院）

福川裕一（千葉大学）

三浦恵子（早稲田大学）

友田博通（昭和女子大学）

リチャード・エンゲルハルト

（ユネスコバンコク事務所）



モデレーター：それではパネル・ディスカッションをはじめます。私は、司会を務めます東京文化財研究所の稲葉と申します。よろしくお願いいたします。

まずパネラーの方々の中で今までにお話を頂いていない先生方から今までの各先生方のお話やこのリビング・ヘリテージに関するコメントを頂いた後で、皆様方から質疑応答を頂き、それにパネラーの皆で答える、あるいはディスカッションする方向で進めてまいります。

最初に三宅先生。三宅先生は今まで中国・中央アジアそれからアフリカで都市計画、建築いろんな分野で国際協力で活躍されていますが、そうしたご経験、それから今日のご発表あるいはそういうことを含めてコメントをいただければと思います。

三宅氏：三宅でございます。大変すばらしい発表をいろいろ聞かせていただきまして、目からうろこが落ちたような思いをしております。一つ私の個人的な印象として、「あ、そうか。」とわかったのが、料理の話です。別にお腹がすいて見てたわけでもないんですが、私もいろんな所に行ってるけれども、料理が比較的質素な国ばかりなんですね。中国はちょっと除きますと、中央アジア、中近東、アフリカ、ロシアなどですから、「ああいう料理を食べながら仕事ができればいいな」と思いながら、ずっと見ておりました。

実際に私の経験の範囲で言いますと、コミュニティーベースというのは大変重要な話だと思っております。実際の経験からいいますと、相手には顔があって、住民の数だけ顔があるわけですね。人格がある。これが実は非常に大変で、例えば我々が資金を持っていくということが向こうに分かると、それは国や地域によりますが、急に向こうが交渉型になってくるのです。つまり我々からいかにお金を引き出すかとかですね。これは日本の再開発でもよくある話です。そういうマネージメントもしなければいけないというのがあります。コミュニティーベースとは非常に大きな原則ですが、マネージメントの仕方、あるいはもっと大きい言い方ですとガバナンスの仕方は、さらに別なノウハウが必要であると痛感しております。

例えばアフリカのように非常に経済力が低いところだと、その分こ

ちらが負担することになるケースが多いのです。しかしその基本的にコストの負担をどのようにしていくか、住民がやる気が起きる、あるいは意欲を持つということがやはり重要だと思います。つまり住民に対してインセンティブをどのように与えるかということ、ヘリテージとともに考えていくということ。それから、ヘリテージと言ってしまうと過去から未来に伝えるものですが、場所によっては、ヘリテージがスラムの中にあたりする、そうするとスラムを将来にまで持っていくことはあまり意味がないような気がするわけです。居住環境の改善というプログラムも入ってくるわけですが、そういうプログラムと資産的に価値の高いヘリテージとの兼ね合いをどうとるかということも大きな問題です。

私は比較的宗教に関係する場所を担当していることが多いのですが、文化多様性という観点から言うと、ある一つの特定の宗教集団を支援すると他の集団がいろいろと問題を訴えてくる場合が多いわけです。ただ、宗教を一つの母体としてものが非常に動きやすくなるという経験もあります。つまり宗教、あるいは宗教者が持っているカリスマ性というもの、これが住民のある意味でのインセンティブというものを引き出して、そして一緒にやろうと、そういう場合にはほとんど無償でやってくれるような人たちがたくさん出てくるということがあります。ですから、そこでのジレンマは文化多様性と宗教ということで、私は宗教というものを優先させて構わないと個人的には思っていますが、逆に宗教に特化すると、今度は日本の公的なお金を持っていくときにOKが取れるかどうかという点で、いろいろ問題に直面したりはしています。

それと、地域でいいますと、砂漠的なところがあったりするんですが、遊牧民が結構いるんですね。今回遊牧民の話はあまりなかったような気がしますけれども、遊牧民というのは価値観が定住民とは全く違う人たちがいることがほとんどですね。モンゴルの非常に高度な遊牧文化を持っているところは別にしまして、中近東からアフリカと、極端にいうとソマリアも遊牧民みたいなもので、その意思決定の仕方、そのコミュニティーみたいなものはもちろんあるんですけども、農村型のコミュニティーではないんですね。彼らは移動しながら、しかし彼らもまさにリビング・ヘリテージとしてのテントのような空間というんでしょうか、あれは昔から高原に伝わっているノウハウでやるものですが、そういうものを生かしながら、暮らし向きをどうしていくのかというところで、実際にいくつかのプログラムでそのような問題に直面しているんですが、これは難しいです。それはいろんなところでリビング・ヘリテージを評価するとき、遊牧のヘリテージをどうするかという議論のチャンスがあまりない、いつか自分でもこういう場を設けてみたいと思っていますけれども、遊牧の人間というのは歴史の垂直軸じゃなくて、空間の水平軸の中で生きてるような人たちですね。その水平軸の中で、生きた環境というものをどう捉えるかと、むしろその「生きた」というところで捉えると、捉えやすいんだと思いますけれども、我々とのコミュニケーションというのが非常に取りにくいというのがあって、こういうリ

ビング・ヘリテージの動きは世界の中でもたくさんありますから、それをどう対応していくかはかなり大きな課題になってくるかなという気がいたしました。

以上です。

モデレーター：ありがとうございました。国際協力ということで去年日本政府が入っていったら向こうが足元を見たりといろいろなことがありました。宗教あるいは遊牧という問題には私自身も興味を持っていますので後で先生のお話をいろいろ聞いてみたいと思います。

もうひとつ方、福川先生。福川先生は都市計画がご専門で、ハノイやいろんなところに行ってお仕事をされていると思いますが。

福川氏：いろんなところには行っていません。ホイアンとハノイしか行っていません。

私は専ら日本でまちづくりを行っている人間でありまして、たまたまベトナムのところに足が抜けなくなっているだけです。それで常にいつも悩んでいるのは、三宅さんはコスモポリタンだからどこへ行っても同じようなスタンスでお仕事されるのですけれど、私のような人間は「いたい日本人の日本でまちづくりをやっている人間がここで何をやったらいいのだろう」というのが行く度の悩みでありまして、何度も自問自答しながら帰ってきていつも答えが見つからないという連続です。さっき友田先生はプレゼンテーションの映像の中で「日本は文化財だけではなくその周りの環境なんかも一緒にまちづくりをする能力・技術がいっぱいあるのだ」とおっしゃっていましたが、私はそこで即座に「それは違う」と叫びました。というわけでこの問題が基本にあります。まずそれをお答えしておきます。



今日はリビング・ヘリテージということがテーマでしたが、ようやく分かりました。リビング・ヘリテージという言葉は英語では『生きている』と理解しているのですが、我々建築家はついついリビングルームを思い出しまして違うものを想像したりするのですが、リビング・ヘリテージの様子がよく分かりました。なおかつ、私はもともとやっているところも町並みですから、そもそもリビング・ヘリテージを対象としているわけで、その点についてリビング・ヘリテージの問題が大事なのは当たり前だと思っていました。そこでデッド・ヘリテージとの対比で新しい視野を得たということはないけれど、思いましたのは三浦さんの話、いわゆるデッド・ヘリテージだといわれているもの自体が、本来は長い歴史の中で周りの人々が使い、住んできた場所で、まさにそこがリビング・ヘリテージだったということが面白いと思います。良く言われる例のイタリアのファシズム時代にコロッセオを綺麗にしたりということに繋がると思いましたし。

菊池さんは考古学者でデッド・ヘリテージを対象にしながら、そこから「リビング・ヘリテージなどがデッド・ヘリテージを壊しているのだ」

と逆襲されましたので、これもやはり必ずしもリビング・ヘリテージを単に対比するものと捉えるのは間違いだと思ったり致しました。

お手元に補足資料1、事例紹介（注：本書 p60 参照）というものがあまして、2 番目に私の書いた文章があるのでそれをちょっと見ていただきたいのです。ここ数年はハノイの 36 町という通り町で調査などをしております。これは刷ってきたばかりのブックレットですが、私が編集したので言って頂ければさし上げられるかと思えます。

それで、例えば 1 ページのところに地図がありますけれども 3 つ丸が書いてありますよね。シタデルがあって 36 ストリートがあってそのフレンチ・クォーターというところですよ。ハノイの代表的な歴史的な地区なのですが、シタデルで国会議事堂を作ろうとしたら非常なすごい遺跡が出てきて以来ここをどう保存するかということで、国際協力を求められ日本政府は非常に熱心に「どう保存するか」とうことについてやっていたらしゃるのですね。そこはデッド・ヘリテージなのですが。私は隣のシタデルの横にある紅河の間にできた城下町で、調査をしているわけです。ここはまさにリビング・ヘリテージというものです。今日訴えたい、訴えたいというよりはどうか考えたらいいのか皆さんにお聞きしたいぐらいなのですが、やはりこの 36 ストリートで仕事をしておりますと、当然今の三宅さんじゃありませんけど、調査ばかりしてないで実際に何とかしろということになりますよね。当然そうしなければならぬと私も思うのです。

地元の人に言わせるとハノイは世界一地価が上がっている所だと言われまして、「嘘だ」と私は思いますが、そのような場所でありまして経済活動が活発なところですよ。そこにチューブハウスといわれるものすごく細長い町屋があって大変面白い街なのです。ここで調査していて 1 軒家を直したい、ぜひ日本の木造文化財の経験に即してやってくれと言われまして。これは 3 ページの図 4 にある建物です。支援をダシにされたのかもしれないのですが、言われたらしょうがないので友田先生にすがりつきまして友田先生が一生懸命走り回って下さったのですが、ついにはファンドレイジングすることが出来なくてすみませんと謝ったという経過があります。

なぜこんなことを言うかということ、実はここで EU がまさに非常に感心するような支援をされていまして、これはまさにリビング・ヘリテージ支援だと思ったのです。建物を直すことからさっきのインタンジブルとか非常に広い範囲でいろんなことをやっています、ここはトゥールズという市が協力を行っているのですが、絶えずベトナム側の人と、よく交流をしているんですね。ぼくらが調査に行っても、「(担当者は)今トゥールズに行っていて、いません。」みたいな話がよくあるのですが、そういう物理的なことから人間的な関係まで非常に深いものを築いているのです。説明を読むと、これは実は 1992 年のリオサミットまで遡る。リオサミットは持続可能な開発を標榜するわけですが、そこで出された補完性原理です。EU の支援は EU そのものが出るのでは

なくて、EUの中のどこかの都市と、この場合はトゥールズ市とハノイ市とがお互いにパートナーシップを組んでいるんな取り組みをしていくというやり方です。やり方がすごいので感心します。そのようなやり方で実はアジアン・アープスというものをいろんな都市で展開しています。他の都市がどうなっているのかは知らないのですが、少なくともこのEUの支援というのは素晴らしいなと思った次第です。考えてみますと、EUというものにはその中に南北問題があってドイツが南の方の経済的に遅れたところの支援をしているということはいっぱいやっているのですよね。そういうことを単にアジアに展開しているということだなと気が付きました、そういうことに長けた国のやり方というものをやはり少し見習った方がいいなと思っている次第です。

そういうことをいうと、ヨーロッパは歴史的都市の再生に非常に長けていて単に文化財だけではなくて住宅を直したり、人を増やしたり中心市街地を活性化させたりなど成功させているわけですね。そこで我が国を振り返ってみると、なかなか素晴らしい経験があるとは言えませんよね。そこでまた最初に戻って俺はいったい何しに来たのだろうということになるのですが、でもよくよく考えてみるとぼくらのためにやっているのかなと思っています。ベトナムの人には悪いのですが、我が国の歴史的なリビング・ヘリテージをよくしていくためにも、実は例えばベトナムのこういう町と一緒に交流しながらいろんな試みをしたり、悩んでいったらいいのではないかなと思いついた次第です。少し最後は自分の意見になりましたが、ありがとうございました。

モデレーター:ありがとうございました。EUがやっておりますアジアン・アープスという事業について福川先生からお話いただいたのですが、ヨーロッパですと公共事業にお金を出す場合に、箱物とかインフラ整備よりも今はどちらかというとリビング・ヘリテージという総称、もっと平たく言えばサステナブルな町おこし事業に公共事業をシフトさせるということになっており、それはEUのアジアに向けての国際協力の中の主流になってきています。日本の国際協力がそういった方向にいくのだったらいいなと思いつつ、どこまで、今どういう状態にあるのか、これから検証されていくのだろうと思います。ありがとうございました。

ここで、今まで全くご質問あるいはコメントを頂かないままにきておりますので、今までの発表あるいはコメントの中でもしぜひ質問してみたいあるいはコメントのある方がいらしたらここでお聞きしてみたいと思いますがいかがでしょうか。どうぞお願いします。

宮田氏: 東京文化財研究所の無形文化遺産部長の宮田でございます。今日ここに参加させていただいて非常に有意義な時間を過ごさせていただきました。と申しますのは、参加する前は無形の話がどの程度出るのかなと思ってきていたのですが、非常に無形文化遺産の部分に関連付けたお話を伺わせていただきました。特にコミュニティーベースの話、まさ

に今の無形遺産保護条約でも、条約の発足当時からコミュニティーの参画をきちんと位置づけようという動きがございまして非常に参考になりました。

ひとつお聞かせいただきたいというか、私の感想めいたことになるのですが、無形と言いますと文化的コンテンツも含めて非常に内心の部分、信仰ですとかあるいは価値観の問題とか宗教といった問題が根底にあると思います。そういった地域の人々の内心の問題をどのように取り扱うか。日本の場合ですと民俗というものを少し冷めた目でみておまして、過去の我々の祖先が行ってきたような生活の証としての風俗・慣習、簡単に申しますと、今我々はサラリーマンをやっている農業はやらなくなったけれど、昔我々の先祖が農耕を主としていてその時の祈りの気持ちで田植踊りをやっていたから、そういうものを続けていこう、というような形になったものがいっぱいあります。先程のお話を伺っていると、特に東南アジア地域ではそういった伝統的な価値観を持っている人が現在もいて、その価値観に基づく生活と遺産の保護を両立させようというレベルなのですが、いずれその価値観は変わってくる。若い世代では変わりつつあるそういうものと、どういった整合性といいますかコミュニティーベースを考えられているのか、どなたでも結構ですので意見を聞かせていただけたらと思います。



モデレーター: ありがとうございます。なかなか本質的な意見だなと。三宅先生もすこし宗教の問題、価値観の問題をどう扱うかということをやっていたのですが、どなたか。じゃあ三浦さんからお願いします。

三浦氏: そうですね。確かに世代によって何を残していきたいか、過去のものはおいて新しいものを優先することがあるかもしれないですが、例えばバリに関して言いますと、バリの場合は確かに観光化が進んで観光に携わっている人が多いのですが、宗教が非常に生活の中心にありまして、自主的なものやお金のために伝統的な価値観を捨てるところまではいっていない。それは社会によって違うのですね。観光の場合でも今まで守ってきた、今まで生活してきた様式そのものが観光の資源になっているわけですよ。どこまで観光化するかということをやりの中で議論してまして、素晴らしいと思うのは、外の人が決めるのではなくて、もちろん外の人との議論はあるのですが、まさに内部的に変わりゆく現状を見ながら決定しているわけです。それは必ずしも独断ではなくてボトムアップの形式がまだ残っていますし、どれだけ伝統的な価値観が重要なものであるかによって何をどういう風に残していくのかというのは社会で決めていくと思うのです。

カンボジアの場合もうちょっと話は違って、やはり新しいものに飛びつくというところがあるのですが、アンコールに関して言えばアンコールの素晴らしさは誰もが認めるところですが、それをどこまでを遺産と見なして、どこまでの範囲の活用を許していくのかということはこれから継続して議論が続けられていくと思うのです。それは政治のシス

テムが違うので一概にどうこうといえないと思うのですが、各社会で相談しながら決めていく、それを私たちも後押ししていくという形がいいと思うのです。すみません、返答になっているのかどうか。

エンゲルハルト氏：三浦先生が包括的にご解説くださいましたが、私から一言付け加えさせて下さい。まさに文化多様性において起きている議論というのは宮田さんの質問の核の部分に触れると思うのですが、つまり内心の深淵なる心の中でおきている進化のプロセスにどうやって対応していくのかということです。皆さまよく理解していると思いますけれど、人は一人一人、自分のパーソナルな文化というものを人生の中で養っていくわけです。重要なのはそこで各個人が自己文化を構築していくための最大限の選択肢を確保できる、最大限の資源を確保できるということです。それが例えば教育の欠如や、政治的な勢力、あるいは現政権、もしくは今の世代がそういった過去の慣習などを保存する能力に欠けているといったような制約があることによって、自己文化を構築していくための選択肢がなくなってしまうとその多様性が失われてしまいます。ですから問題は変化をストップさせて遺産を守ろうという議論でなく、むしろ将来の資源としていかに知識を活用するかということです。



友田氏：少し具体的にお話したいと思います。まず私大変幸せだったなど、たまたま頼まれて行った所がベトナムのホイアンというところで、これは中央政府も地元の皆さんも保存を一生懸命やりたがっていた。完璧に近いという状況が揃っていた。また、三宅さんがおっしゃるのと違ひまして、ベトナムは大乗仏教や儒教の国ということで日本と韓国、台湾と同じで、考え方も基本的なスタンスも非常に近かったということがございます。そのあと実は私自身も、福川さんも大変人気者になりました、いろんな仕事を頼まれた。基本的にお断りしていたのですが、たまたまドンラム村というところのご希望に対しては非常に「筋がいい」と、今日もいらしてますが文化庁の建造物課にお話し、文化庁が決断され、事業を始めました。

この「筋がいい」という意味ですが、ベトナムは共産党政権でありましてその政権が発足するスタート地点で考えますと、農村集落の共同体、コミュンみたいなのが出発点だと伺っています。ところが共産党が自然のままの農村の共同体を是としたのではなくて、かなりマルクス・レーニン的な形態を農村の運営に持ちこんだ。したがって、ベトナムの農村でモデル農村といわれているところは伝統的な形を維持しているのではなくて逆に伝統は失ったということになるわけです。

逆に、なぜベトナムは我々に農村集落の保存への協力を頼んできたかということですが、これは政治的に180度変わり今ベトナムは近代化国家になろうと努力している。農村から工業や商業の産業基盤へと転換しようとしている。その中で、共産党はもともとの発祥の農村集落を伝統的な形態で残して後世に伝え、それによって共産党の政治的立脚点を後世の人たちにわかってもらえるというようなことでありました。それ

ははっきり農村集落保存の方針が示され、法律改正が行われ、まず、集落全体、例えば道路や電気など全てを一応文化情報省が計画を立ててよるしいということになりました。その第1号がドンラム村ということになります。そういう意味から言うと今度は私の方が選んだということではありますが、地域も望み、国も望み、住民も望んで先祖を大事にする地域だったわけです。それまでは政治的な圧力によってお祭りをさせてもらえなかった。おそらく洋服などにも指導があったと思うのです。そういう中でドンラム村の人たちは自分達の伝統を守ろうとしていた。そして、突然政治が変わって生きたままの伝統的農村集落を保存するという状況になった。住民たちの内心については、現地に半年滞在して実感のある小川の方からご報告させて頂きたいと思います。政治的に抑圧があった伝統的なものが復活し始めた。それに対して住民の人たちがどう思っているのか、小川さんの感じることを述べてもらいたいと思います。

小川氏：きちんとした形で説明できるかわからないのですけれど。50年代末から今までずっと北ベトナムは社会主義でやってきた。農村を社会主義的に改変して、社会主義的な形で一律に。それまではそれぞれの特色を持っていたのですけれどそうではなくて、国家権力の下で一律な形に農村を改変していったわけです。それが90年代になってドイモイになってベトナムも今度は『個性の時代』にかわった。これまでの『一般化の時代』普遍的な社会主義の時代から、『個別の時代』に移ってきている、その中で文化とか伝統というものの定義そのものが変わりつつあると思います。ですので、90年代に入ってベトナム政府は伝統的なものをなるべく維持してベトナムの個性を主張していきたいという思いがあるのです。けれど、ただ人々は迷信ですとか、マルクス・レーニン主義で育ってきていますので、宗教というものに対する警戒心も強い。そこをどうやってバランスをとっていくのかベトナム政府がやっきになって模索している。これはおそらく他の地域でもそうだと思うのですが、特に社会主義であったベトナムではやっきになって国が探しているというところですよ。

そういった環境の中で、村の人たちがそれについてどう捉えているかということですが、これもまたアンビバレントで一概にみんなが歓迎しているというわけでもありません。例えば、友田先生のお話の中にもありましたけれど、「私たちは非常に文化的であるからお祭りなどを行って浪費をするといった古くさい考えはしない」という言い方をされるのです。つまり、伝統文化は残していくべきだという意識はもちろんあるのですけれど、それと同時にもっと近代的な生活をしたい、また、近代的な生活に向かっていくという意思が一人の人の中に両方現存在しているということが今の現状だと思います。

一人の人の中にすら矛盾したものが共存しているということは、コミュニティの中で統一をとるのも難しいことだと思います。おそらく日本の町並み保存とかでも、それぞれのステークホルダーがそれぞれの



利害をもつ。日本は経験があると思うのですけれども、ベトナムもこれからこのドンラム村を保存していくにあたって、利益を得られる人と得られない人が出てくるでしょう。そうするとコミュニティーベースで保存に向けてプロジェクトを構築していくというのは非常に難しいと思います。ただもちろんやらなくてはいけないことだとは思いますが。これから村の人たちの中には両方の気持ちが混在しているということがあり、これからそれをどのように形にしていくのかというのが重要ではないかと思います。

モデレーター：ありがとうございました。三宅先生どうぞ。

三宅氏：私の経験でお話させていただきますと、東南アジアのような非常に湿潤な形の、ある意味多神教ではないんですけれども、こういう湿潤なところではなくて、一神教的な世界でやっていることが多いんですね。中央アジアにしてもアフリカのエチオピアかあるいはスーダンとかにしても。ひとつは今、社会、世界的に原理主義的な動きが強いですね。それは政治に限って言うわけではなくて、ひとつの文明論としてみた場合に、いわゆる近代化されてきた。旧ソ連圏で言うとソ連のような権力というものが促進してきた世俗化というものと、古いイスラム価値観、あるいはキリスト教的な価値観というものがいろんな形でぶつかっている。もともとその二重構造というものがあったのですが、逆に世俗の権力というものが揺らいでいるところまでして、それは古い価値観というものがもたげてくる。そうするとその中で何を評価してくるのか、と。パンドラの箱をあけたような状態というのが実態なのですが、いわゆるハッピーな伝統儀礼のみが残っているわけではなくて非常に古い復讐の掟とか、そういうものを含めて古い立法の体系が出てきたりする。

例えばこういうことは中央アジアなんかで仕事をするとき非常に重要になってくるような気がするのですね。私の経験でいうとやはりそこには強い重しがどこかに必要で、さっきカリスマという話をしましたが、何かそういったものを点で置いていかないと我々の仕事は保証されないのではないか。大きい政治と立法的なもの、立法というのは政治と生活が一体になっている部分ですが、それをうまく収斂させるような仕組みというものをもたなければいけない。これはおそらく日本の経験ではあまりないようなものなのですね。

私が例えば今エチオピアの山奥でやっているものなんかは修道院の修復なのですが、当然そこには全体のコミュニティーというものがあるのですが、修道院というものの見方がないとモノが動かない。しかし、それを強く掲げると人は何でもやってくれる。こういう戦略というのが一方であるのかなと思います。これは方法論的にうまく展開できるほど私自身がデベロップしていないのですが、経験として東南アジア的な状況と一神教的な世界とはちょっと違うかな、新しい戦略が必要ではないかなという印象を持ちました。



モデレーター：ありがとうございました。はい佐々波先生。

佐々波氏：佐々波でございます。私は歴史的建造物の保存とか歴史的都市の保存再生等ここ何年かやって参りまして、先ほど福川さんの EU のベトナムのハノイの話が出まして非常に感銘したわけですが、結構 EU という新しい組織が非常に活発に動いているのに対して、日本の海外援助の方は毎年 4 パーセントも減少だということで、先ほど福川さんが言うておられました、かつての『ジャパン・アズ・ナンバーワン』といったような頃の豊かな経済援助を例えば東南アジアの諸国に対しても出来ない。その時に我々としてどういう考えでいくべきかというのが今まさに問われているのだと思います。80 年代のような経済援助は出来ない、90 年が眠っている時で 2000 年になりまして我々はどうしたらいいのかという状況になっているのですが。ただ日本の民間の企業、自動車なんか非常に頑張っておりますし、そういう点でやはりここで新たに経済的社会的条件と我々が専門としている建築技術・都市計画技術的な問題等をいかにして組み合わせて、例えばベトナムに対処するかということが問われていて、どうも EU とはまた違ったやり方を考えなければいけないのではないかとというのが今日私の印象でございます。しからばどうしたらいいのかということをお皆さんでこれから考えていかななくてはならないのではないかと。ただし、かつてのような金、金、金という援助では駄目なのではないか、それから技術だけでも駄目で、いかにして我々の持っている日本文化の良さをいかにしてベトナムなどに活用できるかが問われている、と思います。どうも。



モデレーター：ありがとうございました。やはり 40 分というのは少なかったなと思うのですが、大変重要な面白い話に入ったところですでに 10 分経過しています。何か最後に。はいどうぞ。

柳本氏：よろしいですか。身延山大学の柳本と申します。ラオスで 10 年ほどほそぼそと草の根で木彫の仏像の修理をしておりますが、ラオスは今大変なことになっておりまして。ヘリテージの隣にはカジノができます。それからもうその下にはゴルフ場ができました。それでルアン普拉バンの町の中はバブルです。不動産が 100 倍です。現地の方、僕の友達も町並みから叩き出されて。それがリビング・ヘリテージでしょうかね。これについては色々僕も考えがありますが、そういう現状がある。しかもワット・プーのところで人が立ち退かされているという話を聞きましたけれど、そこも立ち退かしをやっぱりやっているわけです。村ひとつのレベルでカジノをつくることに、今、農民の方が抵抗しています。そういう現状があるということをご報告させていただきます。

モデレーター：ありがとうございました。ルアン普拉バンの話は伺っております。すごく地価が高騰していると。それで住民が追い出されると。私たちが伺っているところです。

エンゲルハルト氏：最後の2点についてその2点を合体させて私の方から回答を試みたいと思います。その中でも特に最後の点である、国際協力の世界において日本がどういったところで比較優位性を発揮できるかということです。今までの日本のODAの使われ方、特に日本の文化遺産におけるODA予算の使われ方をみますと、特徴としてハード重視型・伝統的パートナーシップ重視型であった。そして慎重に投資が1件1件毎に採算がとれるかというアプローチを重視してきたと言えます。ですからこの過程においてかなりの経験と専門的なノウハウや管理手法について知見が構築されて収集されてきたと思いますので、日本としてももうちょっとリスクをとって活動できる段階に移行していいのではないかと思います。

私としては、このリビング・ヘリテージ保護の国際協力という分野でこそ日本がリーダーシップを発揮して世界に知らしめることができる良いチャンスになるのではないかと思います。過去40年間、50年間かけて構築されてきた経験を生かせる分野であると考えます。

リビング・ヘリテージというのは開発援助とイコールということになると思います。開発援助というと不可避免的に物事が変わっていくということの意味します。変わるということになりますとその変化によって影響を受ける異なる人々の異なる期待について対応していくために交渉しなければならないということになります。ただ日本では既に専門家のネットワークを構築しておられますし、国内の専門家にとどまらずアジア諸国とのパートナーシップを通して素晴らしく強いネットワークを構築されました。ですから交渉を進めていくという上でこの強固なネットワークを活用できるという立場にあります。

もちろん過去におきまして日本のODAはハードに注目してきたのですが、そもそもの日本の素質としてソフトも大きな強みを持っている分野であります。そしてリビング・ヘリテージの分野においてはハードよりもむしろソフト面に対する関心が強いのです。それと同時にリビング・ヘリテージにおいても一つ必要な要素は、様々な分野で働いている専門家の間での学際的なパートナーシップを新たに構築していく能力です。ですから日本から別の国にハードを移転していくというような戦略ではなく、知の管理を行っていくリビング・ヘリテージの戦略が有用なのではないでしょうか。日本国内の専門家の間での新たな形態でのパートナーシップを構築していくと同時に地域内そして全世界の専門家をチームに加えることによって本当の意味でのグローバルな国際協力に肉付けしていった、そしてそのグローバル協力の中でリーダーシップをとるとするのが日本であるということです。この知を中心とした進め方をとることによってその相互作用が生まれてきて、その相互作用も今までのようなプロジェクトに反応する対応型の戦略ではなく本当の意味での戦略的な計画立案になっていきます。

今思いついたのは新しく出来たばかりの国連ファミリーの組織でありまして『文明の協力、Alliance of Civilization』というものがあります。ここでとりあげるのは知的・経済的・政治的資源を活用することにより、

直面している様々な問題の解決法を計画していくかということです。これらの問題の中にはイスラム国家と西洋の対立、地球温暖化そしてその中における文化代理人の役割といったものも含まれます。

これはまさにリビング・ヘリテージの本質的な問題です。ですから今までの知に対する対応ということで得てきたノウハウをきちんと整理することによって、知の産物として極めてパワフルな新しい戦略を提案できるのではないのでしょうか。今申し上げていることは非常に曖昧かもしれませんが、日本がまさに無形文化遺産の分野におきまして違いを示すことができる戦略的な分野ではないかと考えます。

モデレーター：どうもありがとうございました。今の話の中でリビング・ヘリテージは広い意味で開発援助の政策の枠組みの一つである。最初に三宅先生がガバナンスという言葉が使われました。基本的にはそれぞれのところの行政的なものの仕組みの中をどう考えているか、そういうもののなかにリビング・ヘリテージをどう位置付けていくのかということです。ですから、その中では強制的な押し付けということはありません。チョイスがある。ものを決めていくのは地元の人であるにしても、その物事を決めていくことに対してたくさんの可能性があるということを知ってもらうということが、リビング・ヘリテージの国際協力の非常に重要な分野であって、それはその地域のガバナンスをどう構築していくかということにも関係していくこと、そういうことなんだと思います。それですからこそ、チョイスがどこにあるかということがいわゆるナレッジマネジメント、要するに知識をどう管理していくのかということだと思えます。

だからそれに向けてどういう協力をしていけるかということに関して、他者は必ずしも他者ではない、福川先生が「日本人がここにいてなができるのだろうか」というお話がありましたけれども、基本的に人間社会は人が訪れて人が出て行ってその中でできていくわけですから、外国人はいずれ外国人でなくなるということもありますので、それが重要なことだと思えます。

『文化遺産の保存』という言葉を使う時点で、非常に私もそれがふさわしい言葉なのかどうなのかよく考えることがあります。無形遺産の保存とか、いわゆるそういう領域に踏み出している中でディベロップメントアシスタンスをどうこの中でつくっていけるのかということが重要なことだと思えます。ガバナンスの構築についてどう協力していけるのか、ということです。

少ない時間で申し訳ありませんでしたけれども、コンソーシアムでもこれは重要なテーマのひとつです。今後またこういう機会を作りたいと思っていますので、引き続きご参加宜しくお願い致します。どうもありがとうございました。

